



第61回桂川祭



第43回鷹鶴祭

2017年4月、国際教育学科(GED)開設。

富士山にいちばん近い学び舎から世界へ——
60年間多くの優れた教育者を育ててきた都留文科大学に2017年4月、新しく国際教育学科が誕生します。
日本文化を基盤とし、国際バカロレアを核とした21世紀型教育で、
国内外で活躍出来る人材を育成します。

国際 バカロレア?

国際教育学科(Global Education Department)の特色

- 国際バカロレアの教員養成とグローバル人材の育成
- グローバルな視点でのリベラル・アーツ教育やディベート教育
- 本邦への英語教育とバイリンガル教育の展開

国際バカロレアとは……
国際バカロレアは、国際教育の分野で最も信頼される資格の一つです。世界100以上の国・地域で実施され、世界最大の国際教育機関である国際バカロレア協会(IBE)が認定する国際教育の分野で最も信頼される資格の一つです。

OPEN CAMPUS 2016 7月16日(土)17日(日)
午前9時～午後3時

都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 ☎0554-43-4341 <http://www.tsuru.ac.jp/>

国際教育学科広告(7月5日朝日新聞掲載)

特集 国際教育学科の開設について…………… 2

国際教育学科準備室 教授 茂木秀昭

新教員紹介 文大に着任するにあたって…………… 4

初等教育学科 特任教授 青木宏希
国際教育学科準備室 専任講師 ノルドストロム・ヨハン

夏季休業を利用して学外で学ぶ…………… 6

初等教育学科教授 中井 均／3年 西牧真優
国文学科教授 加藤浩司／3年 滑川南美
英文学科准教授 三浦幸子／大学院2年 棚田真理
社会学科教授 進藤 兵／2年 澤田雅斗
比較文化学科准教授 内山史子／4年 黒澤 駿

教育実習を終えて…………… 11

初等教育学科3年 大田純也
国文学科3年 森 公崇
英文学科4年 大野友梨香
社会学科現代社会専攻4年 早瀬将也

講演会だより…………… 15

国文学科(国文学科春季講演会)
英文学科(英文学科・英文学会共催講演会)
社会学科(地域社会学会講演会)
比較文化学科(比較文化学会前期講演会)

文大だより…………… 19

熊本ボランティア報告
合唱団8年連続金賞受賞
女子バレーボール部全国大会でベスト8
第43回鷹鶴祭開催
第61回桂川祭開催
夏季オープンキャンパス報告
秋季オープンキャンパス報告
前期修了者卒業式
教員免許状更新講習
現職教員教育講座
こども公開講座
市民公開講座
朝日新聞社 広告掲載のお知らせ
編集後記
本 ぶんだい堂

特集

新学科「国際教育学科」 の開設にあたり



国際教育学科準備室 教授 茂木秀昭

昨年来準備を進めてきた国際教育学科が、平成29年4月から開設の運びとなった。現時点では我が国唯一となる国際教育学科の入学定員は40名、専任教員数は7名でのスタートとなる。

新学科の特色の1つは、国際バカロレア (IB) の教員養成ということである。IBはジュネーブに本部を置く、現代のグローバル社会に対応するための国際教育プログラムで、従来の偏差値教育とは異なり、学生による「探究」と「協働」を主体とする教科横断型のアプローチを特徴とする。小学校、中学校、高校 (DP) レベルの各プログラムがあり、DPを修了すればそれが欧米などの主な大学の入学資格にもなる。文科省は2020年までに国内のIB校 (DP) 200校以上を目標にしており、DP修了を入学資格として認める日本の大学も増えている。新学習指導要領で高校以下の教育に導入を予定しているアクティブ・ラーニングもIBをモデルにしており、IB教育は、いわば「アクティブ・ラーニングの固まり」とも言われ、今後の日本の全ての教員養成に有用となるプログラムでもある。

IB機構に対してIB教員養成 (IBEC) プログラムの設置認可を申請し、1年半の準備の後、この9月、2日間の認可訪問にて高評価での無条件認可が決定した。国際教育学科の学生は、4年間かけてIBの教員資格を取得すれば、日本も含め、世界のIB校で教員

をすることが可能になる。現在、国内の他大学でもIBECの開設を進めているところがあるが、ほとんどが大学院での設置 (学部とは別のプログラム) であり、学部レベルでは理系の大学が一つあるだけで、文系では都留文科大学が日本で最初となる。

新学科の特色の2つ目としては、グローバルな視点でのリベラル・アーツ教育やディベート教育が挙げられる。国際教育学科では、教員養成だけでなく、グローバルにも、ローカルにも、創造的に貢献できる人材の育成を目的にしている。そのために、日本語でも、英語でも教えられる専任教員を揃えているが、欧米、アフリカ、アジア等の歴史、文化、宗教などを学んだり、環境問題などのグローバルな課題や社会の問題を、探究し、議論し、解決策を見出すような教育をおこないたいと考えている。批判的に考え、問題解決能力を身につけたり、論理的にプレゼンや交渉ができるようになるためには、ディベート能力は必要不可欠である。

3つ目の特色としては、2年の後期に全員がデンマーク等の北欧を中心とした国へ留学できることである。小中学校の教員養成をす

るデンマークの 7 つの専門職大学やスウェーデンの大学とは既に何度か行き来をして、交流プログラムの実現に向けて話し合いを進めている。最終的には、同数程度の留学生の受け入れもする予定で、学内でも国際交流がより活発になるであろう。北欧では、授業だけでなく、授業参観や教育実習などのインターンシップもできる予定である。

国際教育学科は、単に IB を外国から輸入するのではなく、そうした教育手法も取り入れながら、あくまで日本文化を基盤にして、21 世紀型の教育を、教員と学生で創造して、海外にも発信していきたいと考えている。



秋季オープンキャンパスの国際教育学科特別講義の様子

国際教育学科の 3 ポリシー

- アドミッションポリシー**：国際バカロレア教育並びに 21 世紀型教育に興味があり、その教育者や実践者になりたい学生
(入学者受け入れの方針)
- カリキュラムポリシー**：英語で授業に参加できる語学力を養成し、探究型のリベラルアーツ教育を通じ、クリティカル・シンキング、コミュニケーション力、課題発見・解決力など現代の社会が求める能力を身につける
(教育課程編成・実施の方針)
- ディプロマポリシー**：グローバルな視野を持ち、アクティブ・ラーニングや探究型の教育ができ、国際的に活躍できる人及び地域創生にも貢献できる人
(学位授与の方針)

国際バカロレア (IB) の学習者像

- ・ 探究する人
- ・ 考える人
- ・ 知識のある人
- ・ コミュニケーションができる人
- ・ 信念のある人
- ・ 思いやりのある人
- ・ バランスの取れた人
- ・ 心を開く人
- ・ 挑戦する人
- ・ 振り返りのできる人



文大に着任するにあたって



文大に着任するにあたって

初等教育学科 特任教授
青木宏希

今年度10月から初等教育学科に着任致しました青木宏希と申します。

歴史と伝統のある都留文科大学で仕事をさせて頂けることは大変光栄に感じております。宜しくお願い申し上げます。

私の専門は図工・美術とデザインです。

私は現在に至るまでの13年間を東京藝術大学美術教育研究室で制作・研究を行ってまいりました。現在も多くの先生方に支えて頂きながら東京藝術大学（以下、芸大）で木工室勤務の非常勤講師として活動しています。芸大では利用希望者への木材加工の指導と道具などの管理や整備、安全使用講習などを担当しています。また、芸大同研究室からの推薦を受け、大学部局間の協力関係にある東京医科歯科大学教養部で「芸術Ⅰ」の授業もおこなっております。授業は「デザイン概論」と「デッサン実技」を受け持ち、将来、医師になる学生に教養科目として授業を行っています。また、一昨年から活動を始めた東京都台東区の「少年少女発明クラブ」では小学生、中学生と発明に関す

る活動を行っています。そういった経験から図工・美術の分野と他の分野が専門領域を超えて横断的に関わり合いを持つ事は自身の専門分野を客観視する上でも貴重な経験であると考えようになりました。そして昨年度からこの都留文科大学で「表現Ⅳ」と「デザイン演習」を受け持ち、今年度特任教員として美術教室での学生指導と「図画工作実技演習」や「デザイン演習」等の講義を担当します。また、美術棟施設内（木工室等）の管理運営業務と図工・美術教室主催の地域貢献活動を行います。

この都留文科大学の印象は山々に囲まれ静かで、制作・研究、勉学に励む最高の場所であると感じています。また、学生が自然の四季に関心を持ち、生き物のたくましさやはかなさ、美しさを日々感じることの出来る素晴らしい環境だとも思います。そしてなにより、都留文科大学の熱心な先輩である先生方によって素晴らしい環境や研究設備が学内に揃っていることにも驚きました。それに答えるように熱心な学生

が多く、多くの事に好奇心をもち、手を動かして何かを創り上げることに情熱のある学生も多いと感じています。

美術教室にも授業準備等に使用する為の木工室やそこにある手道具、大型の木工機械などがあります。

私はこういった教室や道具を最大限に活かすため、教育上有効な活用方法を考えながら教室運営や道具使用方法などを検討していくことが必要だと考えています。図工美術は、概ね個々の作品が結果的に出来上がります。そのことから一人で全てが完結すると認識しがちです。しかしながら、一人一人が熱心に制作するためには他者への多くの配慮があって初めて作品が制作でき、完成することが出来ると思います。限りのある材料や道具を他者と共有し使用するからです。この経験は図工美術の授業時間に限らず自分と他者を意識するきっかけになると思います。

簡単に言えば教室管理ですが、それを行うことの深い意味を学生指導や制作活動の中で伝えていきたいと考えています。



木工室

文大に着任するにあたって

もっとメディア・
リテラシーの力を国際教育学科準備室 専任講師
ノルドストロム・ヨハン

2016 年 10 月より国際教育学科に就任いたしましたノルドストロム・ヨハンと申します。出身はスウェーデン王国、ストックホルムの北に、歴史あるロスラーゲンと呼ばれる地域ですが、2008 年から東京におりました。

私はストックホルム大学の日本研究学科と映画研究学科の大学院を卒業後、早稲田大学文学部演劇映像学科の博士課程を修了し、日本学術振興会の外国人特別研究員として 2 年間明治学院文学部芸術学科にいました。

私は国際教育学科で映画研究や現代映像文化や日本のポップカルチャー研究などの科目を担当します。日本映画史、特に戦前日本の無声映画からサウンド映画への変化時期と日本初のトーキー映画製作所の研究に携わってきました。子供の時から映画への興味が強く、特に日本の映画や映像文化への興味が徐々に強くなってきました。数多くの日本映画をスウェーデンで見て、いつか日本語を習って、東京の大学で日本映画史を勉強したいと思いました。また

早稲田大学の博士課程に居ながら、国際映画祭のフリーランス映画キュレーターとしての活動も始め、海外にまだあまり知られてない日本映画史の様々な優れた映画をヨーロッパとアメリカに紹介したこともあります。最近では今年の 10 月に日本の国立近代美術館フィルムセンターとコラボレーションして、内田吐夢監督の特集をニューヨークの近代美術館（MoMA）で紹介しました。

私は国際教育学科で学生の皆さんに映画や現代映像文化を分析しながらメディア・リ

テラシーの力をもっと身につけさせてあげたいと思っています。

様々な映像メディアに対して色々な視点から分析方法を交えながら、クリティカルリーダーになれる学生、つまり自分自身で考えることができる学生を育成したいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



穂高岳、2016 年春

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

百聞は一見に如かず



初等教育学科教授
中井 均

地学的自然は千差万別、たいへん地域性が強いものです。身の回りのせまい地域の観察だけでは十分とはいえません。そこで地学ゼミでは、毎年、ゼミ生が今まで訪れたことがない地方を選んで野外見学をしています。移動しては見学、また移動しては見学という、密度の濃いタフな4日間でしたがトラブルもなく終わることができました。これからも、安全面に配慮しながら、学生諸君にできるだけ多くの経験を積んでもらいたいと考えています。



四国合宿で学んで

初等教育学科3年 西牧真優

8月9日～12日にかけ、私たち自然環境科学専攻の地学ゼミは四国へゼミ合宿に行きました。4日間レンタカーを借りたことで、自由に行動しながら観察することができました。この4日間で香川、徳島、高知の3県を渡り、多くの場所を観察することが出来ました。主な観察場所は、香川県では石の民俗資料館・五剣山・国分台、徳島県では鳴門海峡・土柱・高越鉾山・



立川溪谷での化石採取

立川溪谷、高知県では穴喰・室戸岬・龍河洞・手結岬でした。サヌカイトや庵治花崗岩、それ以外にも四国に来たからこそ見ることが出来る地層や岩石をたくさん観察することが出来ました。事前学習として、見学地を大まかに調べていったことと、先生の解説を聞くことで学びを深めることができました。多くの観察をしたなかで私が印象に残っているのは阿波の土柱と立川溪谷です。阿波の土柱はいままで土柱自体みたことがなかったため、天然記念物に指定されている土柱を目の当たりにしてその大きさに圧倒されました。メカニズムが分かっているにもかかわらず柱のようになるということがとても衝撃的でした。立川溪谷では全員で化石の採取をしました。珍しいものは採取できなかったものの、自分たちの手で採取し、それがどんな化石



室戸岬の展望台にて

なのか知ることが出来る楽しさを学ぶ事ができました。また、石を見てそれがどんな化石なのか自分で判断できるまでの知識をつけたいと思いました。今回のゼミ合宿では学習をメインにしながらも所々観光も取り入れました。鳴門海峡で船に乗り、鳴門の渦潮を見ました。事前学習で鳴門の渦潮のメカニズムが分かっていたことで、より渦潮のすばらしさを感じながら見る事が出来ました。香川のうどん、海鮮などおいしい食べ物を食べた事もとてもいい思い出です。私は山形出身のため、初めて訪れた四国では学習面でも観光面でもすべてが新鮮で中身の濃い4日間を過ごすことが出来ました。今回学んだことをこれからのゼミの活動に生かしていきたいと思っています。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

実は身近にあった 文学史跡



国文学科教授
加藤浩司

今年度の国文学科専門科目「日本文化史演習」では古川裕佳先生と私が担当して都留市内芭蕉句碑めぐり（5／2）をはじめ、富士吉田・河口湖方面（7／2）と、三鷹・神田神保町（8／17）の「文学史跡めぐり」を実施しました。例年は京都・奈良などの有名な観光地を回ることが多いのですが、あまり知られていない地元や東京近辺の文学史跡は文大生にとってかえって新鮮だったようです。履修学生が少数だったため当初目標としたみんなでワイワイガヤガヤ企画するという感じにはなりませんでした。最後は学生だけでお手製のパンフレットも完成でき、それなりの収穫は得られたようです。個人的には地元やお気に入りの「吉田のうどん」が紹介できてよかったです。



日本文化史演習に参加して

国文学科3年 滑川南美

日本文化史演習を履修して、5月2日、7月2日、8月17日の計3回にわたって身近な文学史跡を見て回りました。都留にゆかりのある文学史跡や富士山と関わりの深い文学作品、実際に足を運ばなければ知ることのできない町の雰囲気など、限られた時間の中でたくさんものを吸収することができました。

5月2日の都留市内めぐりでは芭蕉句碑をメインに、普段だったら足を止めて見ることがないような様々な史跡をじっくりと見て回りました。存在は知っていたけど行ったこともなく、何があるのかも知らなかったミュージアム都留や都留市商

家資料館では、都留の歴史について、当時を再現した展示や地元で活動している方のお話から知ることができました。知れば知るほど都留は歴史のある、魅力あふれる町だと気づいて、今都留に住んでいる自分が誇らしくなりました。

7月2日の富士吉田・河口湖めぐりでは、個人的にずっと行きたかった『富嶽百景』（太宰治）の舞台である天下茶屋に行くことができとても満足でした。当時太宰が見ていただろう景色、太宰が使っていた道具などを間近で体感することができて、嬉しかったです。この日は快晴で富士山がよく見え、夏真っ盛りだったため雪はかかっておらず、太宰の「こんな富士は俗でだめだ」という声が聞こえてくるようでした。他にも、富士山レーダードーム館やふじさんミュージアム、御師旧外川家住宅見学など、富士山尽くしの1日でした。

8月17日の三鷹・神保町めぐりでは、前回に引き続き太宰治と関わりの深い場所を歩き、実際に訪れなければ出会えない



富士吉田市 北口本宮富士浅間神社にて

古書などを見て回りました。太宰治文学サロンや、太宰の作品で登場する店の跡地など太宰の生きた跡をめぐることで、太宰との距離感が縮まった気がしました。神保町では古本屋巡りをして、図書館でもネットでも見つけられないような素敵な本に出会うことができました。これからゼミや授業での資料づくりで思ったような本が見つからないときは、神保町を訪れようと思います。

どの回でも、少ない時間の中で想像以上の濃い体験をすることができました。普段の生活圏では見ないもの、見つけられないものに出会うことができ、実際に足を運び体を動かすことの大切さに改めて気づかされました。閉じこもっているだけでは知ることのできない世界があるということを体感できたので、これからももっと視野を広げて行動範囲も広げていけたらと思います。



富士吉田市・河口湖町
文学・歴史めぐりイラストマップ

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

世界レベルの英語教師
を目指して英文学科准教授
三浦幸子

CELTA(Certificate in English Language Teaching to Speakers of Other languages)はケンブリッジ大学英語検定機構が提供する、世界中で英語を教える国際資格が取得できるコースです。棚田さんは厳しい審査をクリアして、9月に実施されたバンコクでの集中コースに参加し、15歳から60歳代の国籍も母語も英語を学ぶ目的も様々な学習者を相手に英語授業を行う好機を得ました。コース参加者のほとんどは教師になる予定の学生で、米国出身の母語話者と中東やアジア圏からの人々が混在し、他参加者との関係性においても多くの刺激を受け、様々な視点から英語教育を学ぶことで、英語教師としての成長につながれたと思います。

バンコクで CELTA に
参加して

英語英文学専攻2年 棚田真理

夏季休業期間を利用して、タイでCELTAの4週間集中コースを受講しました。このコースでは、英語教育に関する理論を学ぶだけでなく、実際の学習者を相手に教室で実践を行います。コース終了後には、全行程でのパフォーマンスが評価され、合格すれば世界中で英語を教える国際資格を取得できます。評価対象は、4つの論述式課題と専門家によって査定される8回の模擬授業(合計6時間)です。

私が指導を担当した生徒たちは初級と中級に分かれていました。生徒たちの国籍や母語は多様だったため、授業はすべて英語で行う必要がありました。最初の2週間は、初級クラスを担当しました。このクラスにいるほとんどの生徒は難民であり、タイ語を話せなくてもタイで生活するために英語を学んでいます。皆、英語を学ぶモチ

ベーションが高く、初級とさえないほど毎回授業で発言する生徒が多く、教える側としてもやりがいがありました。後半の2週間は、中級クラスを担当しました。こちらも学習意欲が高く、就職活動で忙しい日々を送りながら英語の授業を受けに来る人もいました。多くが、生活レベルを向上させるために英語を必要とし、とても努力していることがわかりました。

今回 CELTA に参加した受講生は22人で、通常は5～6人のグループに分かれてコースを受けました。査定対象となる週2回の模擬授業のほか、指導者側の人数が不足していたため、査定されない授業も他の参加者たちと力を合わせて担当しました。私は、指導案作成や教室管理能力の部分は「とても優れている」と評価されましたが、課題であったのは時間管理でした。緊張していたこともあり、



CELTA に参加した仲間たちと

また、生徒中心の活動をできるだけ入れようとしたため、複雑な指示や説明が上手くいかず、時間配分に支障が出ました。しかし、指導教官からのアドバイスや、他の参加者と相談して教材や活動を精選したおかげで最終的には課題を乗り越えることができました。

CELTA コースは思っていた以上にハードで、翌日の授業のための指導案を何度も修正し、寝ないで学校に行っていた日も何度かありましたが、様々な教育または文化的背景を持つ人々に出会ったことで視野が広がり、一人では思い描けない授業作りや問題解決策を学ぶことができました。教育現場でのチームワークの大切さも実感でき、4月から横浜市の高校で英語教師として働く際にも今回の経験が活かせると思います。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

夏休みを利用した海外での学習



社会学科教授
進藤 兵

社会学科専門科目「フィールドワーク」の一環で、現代社会専攻では海外自治体調査を企画してきました。今年は9月に、3泊4日の日程で韓国ソウル市の「福祉国家型都市政策」をテーマとして調査を行いました。私自身、十数年ぶりのソウル訪問でしたが、都市再開発の劇的な進展と、地下鉄での韓米中日4か国語表記（韓国社会の国際化）やエレベーター設置（バリアフリー化）は印象深かったです。残念な点は、参加する学生が数年前と比べて減少していることです。学生の貧困化（学費、奨学金返済・家賃高騰、低賃金長時間バイト、仕送りの減少）も一因でしょうか。



海外フィールドワークを通して

社会学科2年 澤田雅斗

私は9月5日から4日間の日程で行われた韓国ソウル市でのフィールドワークに参加しました。ここではソウル市の福祉国家型都市政策と市民自治というテーマで聞き取り調査を行いました。

海外渡航経験がなくフィールドワーク経験も浅く、不安と緊張がいろいろ混じる4日間でした。しかしこの経験はその緊張や不安を大きく上回るものでした。聞き取り調査のみならずソウル市の景観や日常会話、電車の中の様子に至るまでありとあらゆることを蓄積しました。

その一例として鉄道やバスなどで用いられる交通系ICカードを挙げます。韓国は「T-money」日本は「Suica」が代表的です。使った感想としてT-moneyの反応は遅くSuica感覚で使うと読み取りエラーを起こしそうでした。

その後調べると、日本の方が早くより多くの人を通せるNFCタイプですが、韓国の方が国際的には一般的とのこと。そこから、なぜ日本はこの選択をしたのかという問いが生まれ、都市の人口と交通機関の関係性を考えることにつながりました。このように韓国のことを考えるのみならず、日本のことを考えるときのツールとしてこの経験がいきます。

ツールを増やすことは大学の科目であっても可能ですが、外に出て自分の興味関心のあることはもちろんのこと、自然科学分野など接点が薄くみえるものから得ることも多いと感じました。同時に自然科学の教養が社会を考えるツールとなることを強く感じました。このフィールドワークは自分自身の学び方を考えるものにもなりました。



最後になりましたがこのフィールドワークで指導してくださった進藤兵先生、河添誠先生、通訳を担当された常葉大学安周永先生、そして聞き取り調査で協力してくださった、ソウル市役所経済民生諮問管のクォン・ジョンソン氏、「福祉国家ソサエティ」の方々、ウン・スミ氏、キム・ミンス氏、ジョ・ソンジュ氏、チョン・ギョンソク氏に感謝の意を表します。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

東南アジアの社会の
空気を知る比較文化学科准教授
内山史子

東南アジア社会論のゼミでは、東南アジアの社会を歴史、文化といった視点から研究しています。研究対象地域が遠方のため、ゼミ合宿を現地で実施することは出来ません。しかし、ゼミ生たちは積極的に東南アジアの様々な地域を自ら訪ね、テキストで学んだことを実際の東南アジアの状況のなかで考え直したり、NGO活動に参加したり、あるいは自分の関心のある事柄について資料を集めたりしています。とくに、社会を構成する人種・民族の多様性や経済格差などは東南アジアの重要な特徴です。どのような問題も、この特徴と切り離すことが出来ないため、自分の足で現地を歩き、人びとと接することは、ゼミでの学習に広がりを与えてくれます。

海外インターンシップと
参与調査を通しての学び

比較文化学科4年 黒澤 駿

この夏、私はシンガポールにて開催されたビジネスインターンシップへ参加してきました。「シンガポールで起業せよ」をミッションに具体的なビジネスプランを練り、それを様々な起業家の方へプレゼンテーションをして投資をしてもらう、という内容でした。大阪で計4回、シンガポール現地で計5回のプレゼンに加えて、数回の勉強会と市場調査を含む約1か月間のプログラムでした。

私がこのインターンシップに参加した目的は2つありました。1つ目は、社会に出る前に海外での「ビジネス」を本気で考えるということでした。2つ目は、インターン中の市場調査に加えてビジネスとは別に、自身で作成したア

ンケートなどの参与調査を試みることでした。この2点を目的とし、私は研究の専門地域でもある東南アジアのシンガポールへ訪れました。

学んだことは数え切れないほどあるのですが、その中でも特に印象的であった学びをインターンシップと参与調査それぞれの観点から述べていきます。

私がビジネスインターンシップで学んだことは、「伝えることの重要さ」すなわち「端的に述べる技術の重要さ」でした。本質を捉えながら端的に物事を述べることでできると、アウトプットの量を増やすことができますし、伝えたい内容もブレにくくなります。起業家の方に耳を傾けてもらえる時間

は最長で5分間のみであるため、この時間内に商品内容から収益モデルまですべての内容を伝えなければなりません。数回の発表を重ねていくうちに、優先すべきものとそうでないものの吟味や、例えば図を利用するなど伝え方の工夫を凝らすことにより端的なプレゼンを実現することができました。



投資家へのプレゼンテーションの様子

シンガポールにおける参与調査では、卒業論文で対象とするシンガポールの多文化共生に関してリアルな声を得ることができました。多くの言語や民族が混ざり合う多文化社会であるシンガポールにおいて、現地で直接聞いたアンケート調査は非常に重要なものとなりました。仮説を立て、それを調査すべく自分の足で情報を集めるということは、研究のモチベーションの向上にも繋がりますし、書籍などには無い自分の必要とするデータをダイレクトに調べることが可能にしてくれました。しかしそれと同時に、アンケートの言語設定や対象者の選択など、私自身の参与調査の方法に課題も残りました。改善策を考え今後の調査に生かしていきたいです。

以上のように、シンガポールでの日々は私にたくさんの学びを与えてくれました。椅子に座っているだけでは見えないものを、実際に自分で動いて見つけに行くという積極的な気持ちをこれからも大切にしていきたいと思います。



シンガポールインターンシップ集合写真

教育実習報告



教育実習を終えて

初等教育学科 3 年 大田純也

私は9月5日から30日まで、地元の岡山県倉敷市立富田小学校にて教育実習をさせていただきました。実習が始まる前は一ヶ月の実習は非常に長く不安に思っていました。実習を終えた今となつては、非常に充実しておりあつという間に実習が終わりました。

私は5年A組、25人の児童たちと毎日を過ごしました。実習の目標として教師らしい言動を心がけるというのを心に決めていました。なかでも児童との関係作りには悩んだところが多々ありました。子どもたち目線に立って良いところは褒め、駄目な所は注意をするというようにメリハリをつけながら関わっていきました。子どもたちと休み時間に何気なくする会話、業間や昼休みに鬼ごっこやドッジボールをする時などから

子どもたちとの関係性を作っていきました。

実習校では合計で9回の授業をさせていただきました。授業を作ることは非常に難しいことでした。自分の伝えたいことをどのように伝えれば子どもたちがわかってくれるのかということを考え、何回も指導案を書き直しました。いざ授業となると緊張で全くうまく話せませんでしたが、そのような時に子どもたちが助けてくれるのです。発問がうまくいかず授業の中に無音の時間が生まれてしまった時には、多くの子どもたちが自分が考えたこと、こういうところがわからないと教えてくれました。大学で書く指導案と違うことは、目の前に子どもの姿があるということです。あの子ならここでこう言うだろう、答えてくれるだろうと予想しながら

指導案を書きました。何より面白いのは、自分の予想を超えた答え、考えをしてくれる子どもたちです。授業ではうまくいかないこともありましたが、また先生の授業が受けたいと沢山の子どもたちが言ってくれました。

実習校での実習生は私だけだったので、すべての学年の子どもたちと関わるができるよう実習校が配慮してくださいました。1年生へは朝の時間での読み聞かせ、2年生へは体育の授業参加、3年生は社会科のスーパーマーケット見学、地元農家さんご協力によるりんご狩り、4年生は授業見学、6年生へは2クラスに英語の授業をさせてもらいました。すべての学年と関わらせてもらう中で気づいたことは、たった1年しか変わらない子どもたちですが発達を上学年、下学年でまったく違うということです。1年の差でこれほどまでにできることが違ってくる。言い換えると1年でこんなにもできるようになることが増えるということです。しかしながら、そのできることをできるようにするのは教師も大きく関わってくることであって非常に責任の大きな仕事であると再認識しました。

終わりに、教育実習に行つて私は教師になることを決めました。しかし、今大学で勉強していることだけでは現場で全く通用しないということを感じました。残りの大学生活で子どもたちに自信を持って伝えることができる経験を沢山して教師になろうと思います。



子ども達からもらった色紙と手紙

教育実習報告



教育実習を終えて

国文学科3年 森 公崇

この夏、母校の中学校で四週間の教育実習をさせて頂きました。実習に先立ち、「ゼミで研究中のICTを活用した授業実践をする」、「積極的に生徒とコミュニケーションをとる」の2点を目標として掲げました。

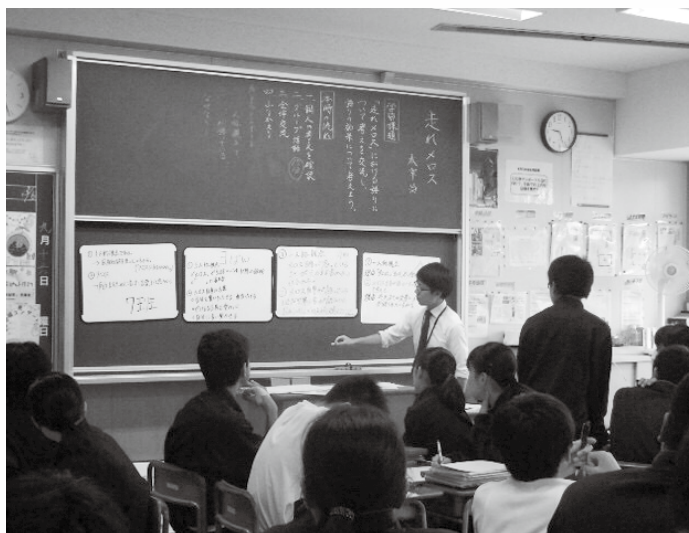
まず衝撃だったのは、私が在学していた当時よりICTの環境が整備されていたことです。プロジェクターが常設され、各教室にWi-Fi環境が整い、40台のiPad-miniが揃っている。たった数年間でここまで変わっているのかと驚き、また学校教育が大きく変わり始めている現実を目の当たりにしました。この大きな変化を踏まえつつ、情報教育担当の先生から「ICTは目的ではなくあくまでも手段であり、これを忘れてはいけない」とのお話がありました。そこで、本来の目的を忘れないように気をつけながら、iPadの効果的な利用法を探りました。実際には、スライドの映写、動画撮影などのために利用し、無理なく取り入れることができたのではないかと思います。

教科担当の先生は、「自由に授業をして構わないが、その中で生徒たちにつけさせたいコトバの力は何なのか、をはっきりさせてほしい」と繰り返しおっしゃっていました。この助言が、授業作りをする上で、常に自分の悩みとなり、また授業を良い

ものにするきっかけとなりました。例えば、小説読解の授業で、発問に対する答えが一つに決まらない時、生徒個人の拡散的思考が全体で共有されて終わるような授業をしてしまったことがありました。もちろん、時間の制限がある中で、仕方がない部分もあったのですが、生徒も私もモヤモヤした感覚のまま単元が終わってしまいました。指導教諭の先生からは、「本文の叙述を根拠として意見を述べさせることがしっかりできていれば、拡散的思考を含む授業であっても、生徒にコトバの力をつけさせられたのではないか」という指摘をいただきました。生徒の成長を見据えて授業する大切さを知り、また、「つけさせたい力」を具体的にどう授業に反映させるかが課題として残りました。

クラスの生徒たちとコミュニケーションをとることは予想以上に大変でした。積極的に話しかけてくれる生徒もいる一方、話しかけてもあまり反応を示してくれない生徒もいて、十人十色の性格を持つ生徒たちと意思疎通する難しさを感じました。クラス担当の先生からは、高度な内容を持ち掛けるのではない、何気ない会話から始めると良い、とアドバイスを受けました。限られた時間の中で、クラス全員と会話するための工夫として、授業開始前は早めに教室に入り、授業準備をしながら生徒たちと交流するというルーティーンを始めました。その結果、だんだんと会話が弾む場面が増えてきたように思います。

四週間を終えて、恵まれた環境で実習をさせて頂いたことに感謝するとともに、大きく教育が変わろうとしているこの時代に教員をやる醍醐味を少しでも味わえた気がします。今回の経験を生かし、新しい学びに向けて邁進していきたいです。



授業中のひとコマ

教育実習報告



教育実習を終えて

英文学科 4 年 大野友梨香

2016 年の 5 月末から 4 週間、母校の公立中学校へ教育実習に行かせていただきました。実習中は多くのことを吸収でき、一日一日がとても充実した時間でした。多くの先生方に支えられながら、生徒と一緒に学び時に支えられたあつという間の 4 週間だったように感じます。不安と緊張が入り混じりながら担当クラスの教室へ入ると、黒板には「大野先生、ようこそ 2 年 8 組へ」と書かれていました。とても嬉しかったのを覚えています。それと同時に、生徒にとって私は「先生」なのだと実感し、全力で取り組んでいこうと決意を新たにしました。

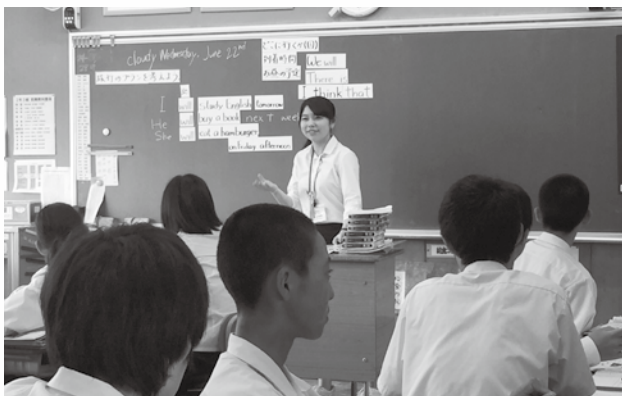
打ち合わせの際に教頭先生や指導担当の先生から「なるべくたくさん生徒と触れ合ってください」「自分からどんどん話しかけていってください」という言葉をいただきました。そこで実習に臨むにあたって、「生徒理解」そして「信頼関係」を作っていくことを大切にしようと考えました。生徒との信頼関係を

作っていくために、まずは全員の名前をなるべく早く覚えようと決めました。名前を覚えることを苦手と感じていましたが、3 日間で絶対に覚えるという目標をたて、早く名前を覚えられるようにと先生と生徒がくれたクラス写真に助けられながら全員の名前と苗字を覚えることができました。読み方が難しい、または珍しい名前の子にはその子に直接聞きにいき、生徒に話しかけるいい機会でもありました。名前を聞いていると周りの生徒たちも「これ読める?」「この子はこう読むんだよ」などと話に加わってくれコミュニケーションの輪が広がりました。名前を覚えたことで話しかけやすくなり、生徒との距離が縮まったように感じました。

実際に授業を行うのは 3 週目からだったので、1 週目、2 週目はなるべく多くの担当クラスの授業見学へ行きました。私の担当は英語ですが他の教科では生徒たちのまた違った表情や姿勢を見ることができ、指導案作

成の際に発問や活動、時間を工夫するために大いに役立ちました。授業は 2 クラス担当させていただきましたが、クラスの雰囲気も違えば、生徒の一人一人がまったく違った個性を持っていました。実際に授業を行ってみると、頭の中で予想していた答えとは違ったものが返ってきたり、反応がクラスによって違ったりして常に手探りの状態でした。特に最初の頃は考えてきた活動を進めることに必死で予想していなかった答えへの対応や、理解が不十分な生徒への支援などが上手くできず、満足のいくものではありませんでした。生徒に対して申し訳ないという気持ちと共に自分の力不足を痛感していました。そんな時、「先生の授業楽しかったです」といった生徒たちの言葉は素直に嬉しく、何よりの支えとなっていました。生徒のために生徒に寄り添ったより良い授業にしようと考え、指導担当の先生からご指摘いただいた改善点や良かったところを意識し、生徒のことを思い浮かべながら次の授業に生かそうとしました。

実習を振り返ってみると、悔しかったり悩んだりすることもありましたが、不思議と良い思い出ばかりが浮かんできます。教員という職業は決して容易なものではなく、悩みや苦しいことも多くあるかと思います。しかしそれ以上に生徒の成長を喜び合える魅力的な職業であると改めて感じることができました。先生方や生徒との「出会い」と実習での「経験」は教員を目指す上ではもちろん、大学生活でも大きな力となっています。来年の春からは本当の先生として教壇に立ちます。お世話になった先生方と生徒のみなさんに感謝するとともに、善き教師像を求めて日々努力していきたいと思います。



実習の様子

教育実習報告



教育実習を終えて

社会学科4年 早瀬 将也

9月上旬から2週間、母校である大垣市立安井小学校で教育実習を行いました。既に昨年、中学校での教育実習を行ったことも踏まえて、小学校教育と中学校教育との差異を明らかにし、それぞれの発達段階に応じた指導を考えていくことを自身の目標とし実習に望みました。2週間という大変短い実習期間でしたが、実習校の先生方にご指導・ご声援を頂きながら、充実した教育実習を行うことが出来ました。

学習指導、生徒指導、学級経営、行事運営など多くことを経験させていただく中で、何を大切にすべきなのかを日々考えさせられました。同時に担当学級が2年生であり、1つ1つのことに対して的確な指示をわかりやすく出す必要があり、指示の出し方や言葉選びに苦労させられることも多々ありました。

まず学習指導において、いかに児童を授業に惹きつけられるかを考え指導案作成を行いました。導入の5分は最も大切であり、その5分でその授業に対する児童たちの意欲は変化します。児童たちを惹きつけるために、絵やものを用いて視覚的・感覚的に授業に引き込むようにしました。また、言葉選びを大切にしました。ただ「特徴を見つけましょう」ではなく「秘密を探してみよう」と好奇心をく

すぐるような言葉に変えることや、「挑戦状だよ」「勝負だよ」といった児童たちに闘争心を持たせるような言葉を使うことがとても効果的でした。

次に生徒指導です。私の担当したクラスは活発で元気がある反面、落ち着きのない児童も多々見受けられました。1人の案件の対応をしている間に、別の場所で問題が起こることも多くあり、自分一人に対応することに限界がありました。そうした中で、教師同士で協力しあい生徒指導を行うことが必要不可欠であることを感じました。同時に指導の際には、必ず子供の行動の理由を聞くことや、何がいけないのか、どうすべきなのかを児童自身に考えさせることが、主体的な行動や公共性を指導していく上では重要であると学びました。

最後に学級経営です。実習の中で1日学級担任の代わりに学級運営を行う全日経営も実施しました。全日経営を通して感じたのは、とにかく時間が無いということでした。授業は1日5時間以上決められた時間行い、空いた時間を見つけて宿題を点検及び提出物の確認をします。しかし休み時間は児童たちと自由にコミュニケーションがとれる唯一の時間であると同時に、何か問題が生じればすぐに生徒指導を行うというのが現状でした。そうした状況で、学級の児童一人ひとりに平等に接し、学級全体をまとめていくことはとても根気が必要であり、時間がとにかく足りないと感じました。

多くのことを体験し、多くのことを感じ、多くのことを学ぶ中で、「教師」という仕事の大変さをとても感じました。しかし、大変さ以上に「教師」の仕事のやりがいや楽しさを知ることが出来ました。2週間というとても短い期間でしたが、とても充実した教育実習であり、この経験を将来に繋げていきたいと感じました。



担任のクラスでの生活科研究授業の様子

講演会だより

国文学科 2016 年講演会

「漢文が日本にもたらしたもの」

～中国六朝文学と日本～

2016年 6月15日(水) 開催
講演者 安藤信廣先生

講演会の様子

安藤先生をお迎えして

今年度の春季講演会は、東京女子大学の安藤信廣先生にお越し頂いた。今をさかのぼる三十年以上前、私が本学の学生であった頃、本学の非常勤講師としてお越し頂いており、私も受業生としてお世話になった。

当時、安藤先生は、法政大学に就職されて間もない三十代前半で、物静かではあるけれども、広範かつ膨大な読書量に支えられた見識を有しており、我々受業生を魅了した。当時は大学前駅などなく、大学が用意していたマイクロバスを逃すと、谷村町駅まで歩かなければならなかったのだが、よく授業終了後に押しか

けて質問したり、時には有志でコンパ（もちろん、先生が幾分か多めに払って）を開いてお誘いしたりした。都留の授業だけでなく、法政大学のゼミにまで、もぐりで参加していた学生までいたと聞いている。

今思えば、先生には随分と迷惑なことだったろうが、嫌な顔一つせず、いつもつき合ってた。授業を受けたのは三年生の時のわずか一年で、しばらく勉強に打ち込みたいとの理由で本学の講師を辞されたが、強く記憶に残る先生のお一人である。

こうした先生の学識・人柄に、ぜひとも学生達に接して欲しいと願って、お招きした。予想に違わず、学生達のアン

ケートを見ても、満足度が非常に高いものであった。中国文学研究の視座から、これまでには見えなかった日本文学の一面があることを、学生達だけでなく、我々教員たちも、改めて教えて頂いたように思う。先生には改めて、心から感謝を申し上げたい。

講演終了後、帰りの電車までの時間を利用して、色紙への染筆をお願いした。少し考えられた後、「天生我材必有用」と書かれた。これは李白・「将進酒」の一句で、「天の我が材を生ずるに必ず用有り」と読む。天が私をこの世に生んだからには、きっと何らかの役割があるはずだ、の意。今や勤務先でも学会でも重要な地位を占めているのに、極めて控えめな選文だと思うが、なかなか将来の見てこない若者達に向けたものなのかも知れない。

(国文学科教授 寺門日出男)

講師紹介



安藤 信廣（あんど う のぶひろ）

東京女子大学教授。1949年、東京都出身。東京教育大学文学部文学科漢文学専攻卒業、同大学院文学研究科修了。

著書、『庾信と六朝文学』（2008年・創文社）、『阮籍「詠懷」詩の語り手』（2002年・創文社）他多数。

講演会だより

英文学科・英文学会共催講演会

『Second Language Attrition by Japanese Children』

2016年6月23日(木) 開催
講演者 服部孝彦氏

今回の講演会は、Second Language Attrition by Japanese Children という題のもと、服部孝彦教授によって英語で行われた。内容は第二言語忘却がメインであったが、一方で第二言語保持についても教えてくださり、帰国子女のみならず外国語学習者全般に通じる概念なども知ることができたのは、私たちにとって非常に有益であったと思う。

外国語の忘却は、言語の持つ四つの性質によって分類され、これらを忘れやすい順に述べると、語彙、形態素、構文、音声となる。服部教授曰く、幼少期（6歳か7歳くらいまで）を英語圏の国で過ごし日本に戻って来た帰国子女は、英語の発音に関してはネイティブスピーカーと大差ないレベルを維持できるのであまり心配することはないそうだ。早期教育の分野でしばしば取り上げられる「臨界期」にも言及し、その考えは音声の習得に関しては当てはまると言う。12歳以降に外国語を学び始めた場合はネイティブスピーカーに匹敵するような発音を

習得するのはかなり困難なのだそう。

言語の忘却そのものについても比喩を用いて解説して下さった。服部教授が我々に紹介して下さいしたのは、Retrieval Failure Theory（検索失敗説）というものであった。人がある単語を忘れる際に、その忘れた単語は脳内から完全に消えてしまっているわけではない。ただその単語を取り出すのに用いる能力が衰えてしまっており、結果としてその単語を思い出せなくなる、という説である。比喩的に言うと、文法でできた棚の上に単語があり、それを取り出す腕が、長らく使っていなかったことによりさび付いてしまうようなものだそうだ。さらに、小学校低学年までの間に日本に戻って来た帰国子女は、文法の理解があまりできていないがために「棚」が未完成であるので、言語保持が困難なのだという。逆に言えば、日本に戻る時期が遅い程、言語保持は成功しやすいのだ。

服部教授は、今回の講演で“Read a lot.”というアドバイス

を何度もなさった。これは決して帰国子女ばかりでなく、外国語学習者一般に向けられた言葉である。四技能の中で「読み」は最も取り組むのが容易であるから、先述のような「腕」や「棚」のさび付きを防止させるのに重要な役割を果たしている。英語教員のなすべきことは、毎日、短時間でも英語を使わせて生徒の外国語能力を保持させることである。また、外国語学習者の、言語に対する関心を失わせないようにすることも不可欠である。英語学習においても、日本人になじみのない不規則変化動詞などを覚える必要があるが、それらをテストのときに思い出せなかったからと言ってそのことを責めたりすると、モチベーションの低下を引き起こしかねない。忘れることは、人間にとって至極当然のことであるという大前提を忘れずに根気よく指導、及び学習し続ける必要がある。

(英文学科2年 黒島大輝)

講師紹介



服部 孝彦（はっとり たかひこ）

大妻女子大学・同大学院教授、早稲田大学講師。言語学博士（Ph.D.）。初等・中等・高等教育を日米両国で受けた帰国子女。米国ケンタッキー州立ミュレー大学（MSU）大学院客員教授等を経て現職に至る。元NHK英語教育番組講師。文科省や教育委員会主催の外国人講師研修会および日本人英語教員研修会での講演、帰国子女教育関係の講演を数多くこなし、中学、高校、高専、大学の全てのレベルにおいての英語スピーチコンテストの審査委員も務める。

主な著書

『EFL reading in Japan: theory, policy, and practice』、メディアアイランド、2012年
『Speak easy: spoken English for Japanese learners』、メディアアイランド、2010年
『国連英検ベーシック・トライアル』、三修社、2009年
『私たちはいかにして英語を失うか：帰国子女の英語力を保持するためのヒント』、アルク、2006年 など多数

講演会だより

社会学科 地域社会学会 2016 年講演会

「現代日本の若者の貧困」

2016年 6 月22日(水) 開催
講演者 藤田孝典先生

講演会の様子

今回の講義では、20 万部越えのベストセラー『下流老人』の著者である藤田氏に、今年度発行された『貧困世代』を解説しながら、現代日本の課題をお話していただいた。

藤田氏はソーシャルワーカーとして、現場から貧困世代の若者(15 から 39 歳)が拡大していることを実感し、これが下流老人としての高齢者の貧困と密接に結びついていると主張する。藤田氏の著作は『貧困世代』『下流老人』と刺激的なタイトルに受け取られがちであるが、一億総中流社会などという言説に惑わされず、自分自身が一体どこに位置するのかという指標となり得る。

貧困の拡大にあたり、これまでは貧困が自己責任型として本

人の資質の問題とされてきたことに対し、藤田氏は社会福祉制度が機能しないほど脆弱であるために困っている人が多いと説明する。

そして近年では、子どもの貧困が取りざたされており、ひとり親世帯の貧困は 50%以上である。貧困は連鎖し、次の世代に負の遺産が引き継がれてしまう。また、生活保護を受けることのできる年収の 9 割の方が生活保護を受けていないという。こうした貧困は偏見や差別に加え、雇用の現場、家族扶養などあらゆることが関連している。貧困を改善するものとして間違った若者論を信じている人が多く、社会を可視化しきれていないと主張する。

人々が普通に獲得してきたも

のを獲得できない人たちが多くいるということ。例えば日本の多くの学生は奨学金を借り、アルバイトで稼がなければ学べない現状にある。社会は若者支援を必要のないものとしているが、社会福祉や社会保障の対象として若者を位置付け、資源の再分配として給付策が最も重要であると主張する。学生にしても社会人にしても給付型の奨学金や住宅費の無償化といった、給付による間接的民主主義を実現すべきであるという。

今回の講義を通して藤田氏は、「実態を社会が知る」「当事者が知る」といった可視化を主張していた。社会の構造は常に変化しているため、教育現場での具体的な勉強に期待がされている。「どこに相談すればよいのか、自分の身を守るための勉強ができると良いな」とおっしゃった。そして、未来ある若者に対して、投資を実施する仕組みを社会のうねりとして充実させる軸をつくる必要があるという。ネットワークの強化等、戦略的に要求していくことを結びとして、講演を閉じた。

(社会学科 3 年 馬場 楓)

講師紹介



藤田 孝典(ふじた たかのり)

NPO 法人ほっとプラス代表理事の社会福祉士。聖学院大学客員教授。反貧困ネットワーク埼玉代表。ブラック企業対策プロジェクト共同代表。厚生労働省社会保障審議会特別部会委員(2013 年)。著書に『貧困世代 社会の監獄に閉じ込められた若者たち』(講談社)、『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』(朝日新聞出版)、『知りたい! ソーシャルワーカーの仕事』(岩波書店)など。

講演会だより

2016 年度 比較文化学会 前期講演会

サンキュータツオさんによる『新 行間論』

2016年6月3日(金) 開催
講演者 サンキュータツオ氏

講演会の様子

2016年6月3日(金)18時30分から、3号館2階ホールにて比較文化学会主催で講演会を開催した。サンキュータツオ氏を講師として招くきっかけとなったのは、彼の熱烈なファンである友人の存在であった。友人に感化され、私もサンキュータツオ氏と居島一平氏のお笑いコンビである「米粒写経」のラジオを聴いているうちに、彼の博学さに尊敬の念を抱いた。そして彼の著書を読んでいるうちに、彼に大学で講演していただければ私たち学生の学びの参考、そして刺激になるのではと思ひ連絡させていただいたところ、快く引き受けてくださり講演をしていただく運びとなった。

サンキュータツオ氏には、従来の正しいとされる作品の文学的解釈や作者の意図にとらわれずに、創造的行為や表現そのものとしての「行間」と、その味わい方について講演していただいた。また文学のフィールドでは俎上にすら上がらないかもしれない二次創作物や妄想の類のサブテキストにも言及しつつ、ジャンルを超えた「行間論」についても、お話いただいた。講演の中でサンキュータツオ氏は、「学問」は「問いに学ぶ」と書くことから「問いを見つける」ということの重要性を強調されていた。実際、私たちは日本において教育を受けてきて、与えられた問いの答えを探すという作業が圧倒的に多かった。

た。しかし大学において学んでいる今、その状況を脱し、常に自ら問いを探し答えを追究しなければならない。文学作品においても学術論文においても、自分なりの行間の解釈から自分なりの問いをたて、答えを模索するというサンキュータツオ氏からの一連の提案は、卒業論文に向けても非常に参考になるものであった。

また今回の講演会では質疑応答の時間において来場者に多くの意見や質問を出していただけた。意見交流の場を設けるための会場選びや座席の配置を心がけたため、積極的な議論の場を提供できたことは非常に嬉しかった。講演後にサンキュータツオ氏からも都留文科大学の学生と会場の雰囲気をお褒め頂き、学生の来場者からも満足の声を聴かせていただいた。

最後になりましたが、遠い山梨の地までいらして下さったサンキュータツオ氏をはじめ、講演会の実現にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

(比較文化学科3年
尾形はづき)

講師紹介



サンキュータツオ

居島一平とのお笑いコンビ「米粒写経」として活躍する一方で、一橋大学非常勤講師も務める。早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了。文学修士。日本初の学者芸人。著書に『ヘンな論文』や『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』がある。日本テレビ『ZIP!』への出演の他、新聞やラジオにおいても活躍している。

文大だより

熊本ボランティア報告

都留文科大学災害ボランティアチームVS（バーサス）を復活させ、5月の大型連休中に学生団体として現地入りすることが決定したのは、最初の揺れから5日後のことでした。4月29日の出発までの9日間でメンバー集めと準備、事前ミーティングが行われ、最終的には4年生4名と1年生2名の6名で熊本に出発しました。

私達は5月1日から7日までの1週間、RQ九州という災害支援団体の一員として熊本県美里町を拠点とし、県内の様々な場

所で活動を行いました。内容は被災者の引っ越し支援やがれき撤去の他に、子ども支援、農家支援、被災者のニーズ調査等多岐に渡り、1週間活動が途切れることはありませんでした。

その一方で、ボランティアの「限界」も痛感することになりました。私達が活動を始めた頃には震災から既に2週間以上が経過しており、人力のみで可能な作業の多くは終わっている状況でした。倒壊家屋は多くが震災後の姿で残されていましたが、重機やそれを扱う免許を持たない私達の手に負えるものではありませんでした。また、各建物には行政によってその倒壊の危険度を示す紙が貼られており、いわゆる「赤紙」、つまり危険を示す紙が貼られている建物にはボランティアは入れません。依頼が来ても赤紙が貼ってあるためにお断りせざるをえない。お手伝いしたくてもできない歯がゆさをメンバーそれぞれが感じました。



活動の様子（熊本県熊本市）



現地の方々と（熊本県南阿蘇村）

それでも、活動後に「皆さんが来てくれたおかげで（依頼者が）笑った顔を久しぶりに見ることができた」などといった言葉を現地の方々から頂けると、「来てよかった」と感じる事ができました。全てのお手伝いはできなくても、ボランティアが「今」「ここに」いることに意味があるのだと実感した1週間でした。

5月と9月に行った私達の活動の様子は本学の環境・コミュニティ創造専攻ブログ（<http://tsuruunv.sakura.ne.jp/subject/kankomi/>）に掲載されております。そちらもぜひご覧ください。

（社会学科現代社会専攻1年 福泉春太郎）

文大だより

都留文科大学合唱団8年連続金賞および 日本放送協会賞を受賞

私たち都留文科大学合唱団は11月19日（土）に鳥取県鳥取市で開催された全日本合唱コンクール全国大会大学ユースの部において、8年連続金賞および日本放送協会賞を受賞しました。連続金賞の記録に対するプレッシャーの中、悲願を達成するべく日々の練習に励んでまいりました。本番の演奏では、これまでの成果を発揮し、思いを込めた演奏をすることが出来ました。全国の舞台で演奏できたことは私たちにとって大きな財産となりました。応援してくださった皆様に心より感謝申し上げます。これからもより良い演奏をできるよう団員一同、精進してまいります。



(都留文科大学合唱団

団長 望月綾乃)

本番を終えて

第36回全日本6人制バレーボール クラブカップ女子選手権大会ベスト8

本学の女子バレーボール部で構成されているクラブチーム Elephant が、8月12日（金）から大阪中央体育館で行われた全日本6人制バレーボールクラブカップに山梨県を代表して出場しました。結果はElephant 史上最高のベスト8という成績を収めることができました。この成績は指導してくださる先生、目標となる先輩、高め合う仲間がいるからこそ、得られたものだと思います。一人一人が努力することでチーム全体の力となり、今回のような結果につながりました。



大会当日の様子

Elephant は毎年成績を上げることができているので、来年は「優勝」を目指します。

日々の練習は時間もスペースも限られていますが、自分たちの取り組み方次第で結果も変わるので、都留文科大学としても、Elephant としても、今後も一生懸命練習に励んでいきたいと思っています。

(初等教育学科3年 山田愛)

文大だより

第43回鶴鷹祭

6月25日（土）と26日（日）の2日間にわたり、高崎経済大学において『第43回鶴鷹祭（都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦）』が開催されました。

鶴鷹祭は平成28年で43回目を数えますが、前回の第42回までは本学の24勝16敗2分けと勝ち越しており、また過去4年間は都留文科大学が勝利を収めております。

そのような状況で、5連覇をかけた本学は『原点回帰』を、対する高崎経済大学は連敗阻止するべく『取り戻せ鷹の誇りを』をそれぞれスローガンに掲げ、各々の競技で熱い試合が繰り広げられました。



開会式の様子



本学の応援団によるエール



競技の様子

開会式では伝統となっている両校の応援団によるエール交換、本学のモダンダンスサークルによるチアリーディングなどが行われ大会に華を添えました。競技が始まると、両校の学生が互いに競い合い、励まし合い、一年間の成果を互いにぶつけ合いました。

2日間の激戦の末、『都留文科大学 7 - 15 高崎経済大学』と惜しくも勝利を逃し、5連覇の夢は達成できませんでした。

来年度は舞台を本学に移し、再び勝利を掴み取るため、本学の体育会の部活動に所属する学生たちが対抗戦に挑みます。来年の熱き戦いは、どちらの大学に勝利をもたらすのでしょうか。「鶴」の勝利に期待します。

文大だより

第61回桂川祭 開催報告



「学生による出店」の様子

11月3日(木)から11月5日(土)までの3日間にわたり、第61回桂川祭が開催されました。今年のテーマは『COLORS』。「桂川祭をつくり上げる・参加する1人1人の色が溢れてひとつになるように、そして桂川祭を彩るように」という意味が込められています。

鮮やかな風船に彩られた開会式でのバルーンリリースから始まり、学内の各団体による模擬店やアーティスト新山詩織さん、お笑い芸人あばれる君さん、平野ノラさんによるライブなどが行なわれ、会場は大いに盛り上がりました。また、全日行われた体験型企画では、スノードーム作りや水ヨーヨー釣りなどを楽しんでいただくことができました。

1日目には今年度の新企画である「つるうみすいぞく館」が開催されました。海のいきものとふれあえる「ふれあい水槽」のほかに、ペンギンのお散歩イベント、ペンギンとの写真撮影イベントなどが大好評でした。

2日目には移動動物園企画の「つるどうぶつえん」も開催されました。小さなお子さんを連れたご家族も多く来場し、文大生だけでなく地域の方々も楽しめるイベントとなりました。

最終日の閉会式では夜空に華やかな花火が打ち上げられ、3日間の幕を閉じました。

酒類購入者への年齢確認の徹底などを行った結果、大きな事故もなく終えることができました。多くの方のご協力もあり、ルールが守られた楽しい3日間になったと考えております。

出店団体の方々や来場者をはじめとする、第61回桂川祭の開催にご協力くださった全ての方々の色が溢れひとつになり、素敵な色で彩られた桂川祭になったのではないのでしょうか。本当にありがとうございました。

《桂川祭を振り返って》



第61回桂川祭実行委員長 小林真美

本年度の第61回桂川祭は、11月3日(木)から11月5日(土)の3日間行われ、テーマは「COLORS」でした。テーマの通り、参加してくださった皆様と一緒に、素敵な色で桂川祭を彩ることができたと感じております。催しなどを楽しんで頂けたなら幸いです。

最後になりましたが、大学関係者の皆様、地域の皆様、学生の皆様のご協力のもと無事に全日程を終了することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

7月16日(土)・17日(日)に夏季オープンキャンパスが開催されました。今年の特徴は、2日間に分けて開催したことです。ここ数年オープンキャンパスの参加者は1800名を超えることが多く、会場に入りきらない、食堂に長蛇の列ができる等の問題がありました。そこで、今年は混雑緩和のために、1日目に英文学科、比較文化学科、国際教育学科、2日目に初等教育学科、国文学科、社会学科、国際教育学科と、2日に分けて開催することになりました。初めての試みで不安もありましたが、蓋を開けてみると大きな混乱もなく、両日で2740名というこれまでにない大勢の方々にご来場いただきました。



キャンパスツアーの様子

参加者の傾向としては、県外からご家族連れで参加した方が多かったように思います。北海道から沖縄まで、全国各地から遠路はるばる本学にお越しいただき、大変ありがたいことだと感じています。ただ、課題であった混雑緩和という点に関しては、2日間に分けてもなお、想定をはるかに上回る人数の来場があったため、来年度に持ち越しとなりました。今後もさらに改善を進め、本学の魅力を一人でも多くの方にアピールできればと考えています。

当日は、大学概要説明会や各学科の説明会・特別講義、個別相談会などに加えて、学食体験やキャンパスツアー、部活やサークルによる演奏・演技など多くの催し物が開催され、大いに賑わいました。この他、初めての試みとして学生主催による個別相談会も催されました。学生たちの笑顔と親切・丁寧な対応に参加者の疲れも癒されたと聞きます。大過なく夏季オープンキャンパスを終えられたのも、この日に向けて準備を重ねてくださった教職員の皆様、学生の皆さんのおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(広報委員長 別宮有紀子)



学科別説明会の様子



個別相談会の様子

文大だより

秋季オープンキャンパス報告

本年度で第9回目となる秋季オープンキャンパスを、10月10日（月）から14日（金）までの4日間（水曜日を除く）にわたり開催しました。

本年度は昨年度の8日間から4日間に期間を短縮しての開催でしたが、例年同様に多くの高校生・保護者が本学を訪れました。

主な内容として、公開授業（90分）への参加、個別相談会、学生の案内によるキャンパスツアー、無料学食体験などを実施しました。また、10日（月）には、来年度より開設される「国際教育学科」の特別講義も開講され、約30名の受験生が講義に参加いたしました。

参加した高校生の総数は延べ378名と、昨年（388名）と同様に多くの受験生が参加しました。

恒例となったキャンパスツアーでは、本学学生がガイド役となり案内いたしました。保護者も含む参加者に対し、キャンパス内の施設などをグループで回り、丁寧に説明していました。参加者からは、「学生の方に施設を案内してもらうことで学生生活がよりイメージできた」、「施設の案内だけでなく、相談にも親身に乗って頂けた」等の声が聞かれ非常に好評でした。

また、その他にも「（授業中に）大学生が積極的に意見交換し、活発な雰囲気を味わえた」、「教員免許や留学について、多くの情報を得ることができた」、「来年度から文大に通えるよう一生懸命勉強に励みたい」といった感想が多く寄せられました。アンケートでは、今回秋季オープンキャンパスに参加した生徒のうち、7割以上が本学の受験を決めており、非常に熱心に講義や相談会に参加しておりました。



キャンパスツアーの様子



個別相談会の様子

前期修了者卒業式



前期卒業式の様子

9月28日（水）、本部棟3階大会議室において、平成28年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は9名の学部卒業者と1名の大学院文学研究科卒業生のうち、6名が出席しました。

当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。

文大だより

教員免許状更新講習

本学では、例年、教員免許状更新講習を開催しております。8年目を迎えた今回は、7月2日から7月30日までの土曜日又は日曜日、計7日間にわたり13講座を開講し、延べ受講者数は483名にのびりました。

なお、今年度から教育職員免許法施行規則等の一部改正に対応した選択必修領域の講習も開講いたしました。

開講した講座は以下のとおりです。

【必修領域】：『教育の最新事情』佐藤隆教授・堤英俊講師、

【選択必修領域】：『危機管理と組織的な対応を考える』大島英樹立正大学教授

【選択領域】：

○小学校教諭向け：『地層と化石の観察』（理科教育）鷹野貴雄非常勤講師・前田誠一郎非常勤講師、『子どもとともに絵本の世界へ』（国語教育）藤本恵教授、『意味のやりとりを重視した外国語活動の授業づくり』（小学校英語教育）上原明子准教授、『数と図形の歴史から算数の楽しさを学ぶ』（算数教育）岡野恵司講師、『感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう！』（図工体育）【図工】竹下勝雄教授・鳥原正敏教授・布山浩司特任准教授【体育】水口潔教授、

○中学校、高等学校教諭向け：『経済学・現代日本経済を学ぶ』（社会分野）村上研一中央大学 准教授、『国語教材の読みと授業づくり』（国語分野）牛山恵名誉教授、『Maximising Motivation in the English Classroom』（英語分野）Hamish Gillies 准教授

○小学校、中学校、高等学校教諭向け：『学校におけるICT活用授業と情報モラル教育』（情報教育）日向良和准教授・杉本光司特任教授、『子どもの心の理解と援助』（教育相談）早川恵子非常勤講師、『学級集団育成の理論とグループアプローチ』（学級経営）品田笑子特任教授

夏季集中講座「現職教員教育講座」を開催

本年度も夏季集中講座として、初等教育学科・地域交流研究センター・教職支援センターの共催による「現職教員教育講座」を、7月25日（月）・26日（火）の2日間にわたって開催いたしました。

例年の通り、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探る「教師の子ども理解と学習指導」をテーマとし、2日間で4講座を開講いたしました。

第1日目は、宮下 聡先生（教職支援センター特任教授）の『いじめに苦しむ子を支える、いじめ解決を子どもの学びにする』と春日由香先生（初等教育学科准教授）の『教科に関する研究講座Ⅰ－子どもがわかる授業を作る・国語－』、第2日目は、山崎隆夫先生（教職支援センター特任教授）の『子ども理解と学習指導』と上原明子先生（初等教育学科准教授）の『教科に対する研究講座Ⅱ－英語を楽しむ授業をつくる－』を開講いたしました。

本講座は、山梨県教育センターによる「十年経験者研修」の選択講座にも指定されており、都留市内だけでなく県内各地の小中学校及び高等学校より、延べ50名以上の先生方のご参加をいただきました。



英語を楽しむ授業をつくる



子ども理解と学習指導

文大だより

子ども公開講座を開催

都留市教育委員会と連携した「子ども公開講座」を子ども達の夏休みの期間に開催しました。

7月30日（土）は、都留文科大学内において、北垣憲仁特任教授による「森の動物の不思議」を開催し、植物や昆虫、都留の山にいる生き物についての話をしながら、キャンパスの中や楽山公園を歩きました。

8月17日（水）は、3号館ホールにおいて、「留学生と遊ぼう」を開催し、コーディネーターを務める留学・国際交流室の小林文子さんと留学生の人たちと百人一首や書道ゲームで交流を深めました。

8月20日（土）は、山梨県富士山科学研究所において、内山美恵子特任教授による「富士山の中の水の旅」を開催し、火山と富士山について、観察や実験を通して学習しました。

これらの講座の様子は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。また、来年の1月にも「読書の楽しさを知る」と題した講座を開催する予定です。



市民公開講座を開催

市民公開講座「日本文学から世界文学へー夏目漱石と多和田葉子の鉄道小説を読むー」と題した講座を、2号館2102教室で全3回の日程で開催し、約30名が受講しました。

今回の市民公開講座は、国文学科の野口哲也准教授による講座で、各回のテーマは、第1回が「夏目漱石と多和田葉子の異郷体験」、第2回が「夏目漱石の鉄道と富士山ー『虞美人草』『三四郎』」、第3回が「多和田葉子がやって来るー『ゴットハルト鉄道』『容疑者の夜行列車』」でした。

今年没後100年を迎える夏目漱石と、今年度本学特任教授に就任した多和田葉子さんの「鉄道」を舞台とした小説を比較することで、この100年間で日本人の意識がどのように〈移動〉したかを考えていきました。

講座の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。



文大だより

都留文科大学が朝日新聞全国版 「国公立大学 進学のおすすめ」特集に登場

7月26日（火）の朝日新聞朝刊「国公立大学進学のおすすめ」に都留文科大学が掲載されました。この特集は、全国から16大学が26日（火）、27日（水）の2日間で8大学ずつ登場し、自大学が持つ魅力や取り組み、今後の大学としてのビジョンについて紹介するものです。

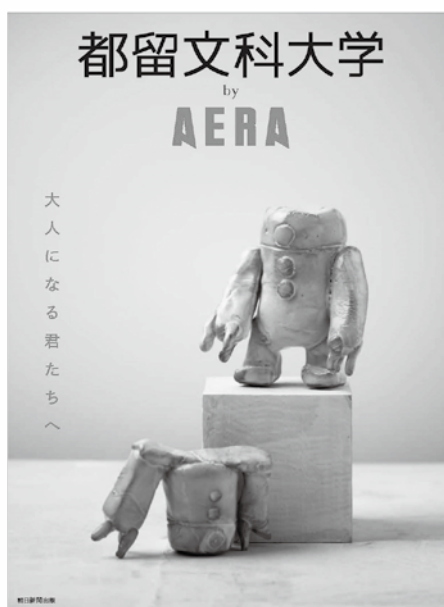
都留文科大学は、「子ども理解」を柱に教員を育てて60年」というタイトルのもと、福田学長による挨拶や教職支援センターで実施している「SAT（学生アシスタントティーチャー）事業」、地域交流研究センターの「クロス・ボーダー・プロジェクト」を掲載いたしました。こちらの記事については、本学のホームページからも閲覧可能です。



朝日新聞朝刊「国公立大学進学のおすすめ」の本文記事



朝日新聞出版 AERA ムック 『国公立大学 by AERA 大人になる君たちへ』



都留文科大学 by AERA

また、朝日新聞出版 AERA ムックの『国公立大学 by AERA 大人になる君たちへ』にも本学が掲載されており、前述の SAT 事業と、国文学科のゼミ活動、来春開設される国際教育学科が紹介されています。朝日新聞出版 AERA ムックは2016年11月より、全国の書店で販売されています。

編集後記

都留と水のこと

山口博史

都留に住んで2年になる。「ツル」という音の響きには何ともいえない魅力がある。都留市役所のウェブサイトにはこの名の由来を植物の「蔓」とする説が紹介されている (http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/forms/info/info.aspx?info_id=14359 (平成28年10月12日確認))。富士山麓の山あいにあたかも蔓が伸びるように家々が並ぶさまをあらわしたものでしょうか。しかし住んでみて感じるのは、かつて読んだ本(後述)に書かれていたことだが、「ツル」の名は「水」のことをさすのではないかということだ。都留の町を歩けばすぐに気づくように、ここには水が豊かに流れている。川や水路だけ

けでなく湧水もあちこちにある。「ツル」についての自分の知識を整理し、関係のことがらを少し調べてみることにした。

鹿児島には「水流」と書いて「ツル」と読む場所がある。横浜には「鶴見」があり、川や水とかかわりの深い地名ときく。私は名古屋の桜山に住んだ時期が長かった。旧居から自転車で少し行ったところに「鶴舞公園」がある。今年8月にゲーム「ポケモンGO」の聖地という報道があった公園だ。もよりの駅は中央線「ツルマイ(鶴舞)」駅(写真)である。

「ツル」と水のかかわりについて書かれた本がある。件の鶴舞公園のある場所はかつて「水流間(ツルマ)」とよばれ、水のあるところだったという。その後、「水流間」を「鶴舞」と書くよう改めたが、時代がさらに下って「ツルマイ」とも読まれるようになったようだ。そのほか、宮崎県の「ツル(水流)」地名や、「ツル」が「都留」と書かれる例について言及がある(山口恵一郎、1977、『地名を考える』、日本放送出版協会、p.93.)。

鶴舞公園から少し行くと元古井、古井ノ坂など、水にかんする地名がある。豊かな水を活用した酒造工場が近くにあったことも知られている。ここまで、不確かな話でしかない。ただ「ツル」の地名に、人の暮らしと水とのかかわりを思わずにられないのである。



鶴舞駅



大島堅一・高橋洋 編著
2016年9月発行
日本評論社 3,000円+税

◇たかはし ひろし
社会学科 教授

地域分散型エネルギーシステム



山本芳美 著
2016年6月発行
平凡社 820円+税

◇やまもと よしみ
比較文化学科 教授

イレズミと日本人

本
ぶんだい堂